

# 会員寄稿

## 仙台から富山へ

株式会社 新日本コンサルタント

開 米 浩 久

### 1. はじめに

宮城県仙台市から富山市に移住、株式会社新日本コンサルタントに入社し、早や2年を経過しました。富山の気候・風土・食・人に順応し、快適な毎日を過ごしています。

建設コンサルタント技術者として、日本各地で仕事をしてきましたが、最も馴染みの薄かったのが北陸。その北陸、富山に移住する決意、移住後の生活についてご紹介します。

### 2. 仙台の辛い思い出（東日本大震災）

#### 2.1 前震（2011年3月9日）

2011年3月9日（水）11:45、三陸沖地震（震度5弱M7.2）が発生。出張先の宮城県登米市内の食堂で津波注意報を確認し、食堂のテレビに釘付けとなる。岩手県大船渡港で最大0.55mの津波を観測、養殖カキ筏の変形・流失が生中継で放送されていた。

当時、宮城県沖地震の発生確率は30年以内99%と言われており『これが宮城県沖地震？小さな地震で良かった』と部下と会話する。

#### 2.2 本震（2011年3月11日14:46）

2011年3月11日（金）早朝より愛知県田原市に出張。新幹線、レンタカーを乗り継ぎ、12:30到着。打合せ開始から1時間を過ぎた14:46、周期の長い弱い横揺れを感じる。2日前の震度5弱を経験しているからか、『弱い地震。一昨日の余震かな？』と思う。同時に携帯メール（会社から大地震を知らせるメール）を着信するも、

打合せ中のため無視。ノックもせずに客先の所長が打合せ室に駆け込んでくる。『仙台で震度7の地震、打合せを中止し早く帰宅してください』。ロビーのテレビは報道特別番組、千葉県市原市の石油コンビナートが黒鉛を上げ、東京九段会館の天井崩落で死者発生。震度7の仙台市内の惨状は???

#### 2.3 帰路（2011年3月11日：田原市～仙台市）

打合せ中止、レンタカーで豊橋駅を目指す。最悪の状況を想定し、途中のコンビニで食料と飲料水を大量に購入。愛知県田原漁港付近の防災無線から津波到来を呼びかけるサイレンと避難準備情報が聞こえてきた。

2011年3月11日（金）17:00、JR豊橋駅で新幹線の運行状況を確認するも当然の如く運転中止。レンタカーはノーマルタイヤのため、レンタカー店舗にチェーンを借りに行こうとするが、店の外まで人が溢れている状況。仙台までレンタカーで帰ることを決意する。

18:00東名高速道路 豊川IC、東京方面は静岡県内で通行止め、やむなく大阪方面に進行するも大渋滞。会社、自宅（仙台市）への電話、メールは全く通じず、レンタカーのラジオ情報だけを信じて、仙台を目指す。

21:00東海環状自動車道から中央自動車に入り、恵那峡SA（岐阜県恵那市）に立ち寄る。テレビは悲惨な映像を繰り返し放送。宮城県名取市の関上大橋付近を走行中の車が津波に飲み込まれる。宮城県気仙沼市鹿折地区が炎上。仙

台市若林区荒浜では数百の遺体を発見。まだ、岐阜県なのに、サービスエリアは自衛隊と報道関係車両ばかり。



図1：発災直後の社内（前職）

#### 2.4 新潟～福島～仙台（2011年3月12日）

2011年3月12日（土）3:00、磐越自動車道通行止めのため、新潟中央ICから国道49号へ。ノーマルタイヤで圧雪路面を慎重に走行するも猪苗代湖周辺は暴風雪が視界を遮る。

携帯電話は緊急地震速報が鳴りっ放し。巨大地震の余震震源が宮城～福島～茨城～千葉～長野～新潟と移動し、我々に迫ってくる。

7:00福島県福島市、国道4号の路上に大量の土砂とともに住宅が滑り落ちている。大渋滞の中、車の窓を開け冷気で眠気を覚ます。後日判明するが、福島第一原子力発電所はベント開始、福島市内の放射線量は既に $10\mu\text{Sv}$ 。



図2：国道4号斜面（福島市）

#### 2.5 仙台市内（2011年3月12日の午後）

2011年3月12日（土）11:00、国道4号を北上し宮城県に入る。福島市内を過ぎてからは渋滞も無く順調だったが、宮城県名取市に入った途端に全く車が動かない。沿岸部に黒鉛が見え、緊急車両のみが動いている状況。仙台空港近くの体育館、ボウリング場には自衛隊、救急隊員が終結し、全ての窓がブルーシートで覆われている。昨晚見た閉上大橋の映像を思い出し、これまで経験したことがない最悪クラスの災害であることを実感する。

2011年3月12日（土）15:00、仙台市内のレンタカー店に豊橋ナンバーのレンタカーを返却。『約1000kmの道のりを21時間、ノーマルタイヤで良く頑張った』と部下2名と解散。

#### 2.6 震災翌日（2011年3月12日）の決意

自宅に辿りつき、夕暮れとともに暗黒の世界が訪れる。水道、ガス、電気等、インフラ寸断に加え、10分間隔で襲ってくる震度5クラスの余震。子供（当時、中学2年の娘、小学6年の息子）の怯える顔を見ると切なくなる。明日から建設コンサルタント技術者としての戦い（激務）が始まる。冷蔵庫の食料は腐敗する前に片付けよう。この生活が何日続くか判らないが、冷蔵庫にあった肉をカセットコンロで焼き、缶ビールを1本飲む。

JR不通のため、明日からは自転車通勤、ゆっくり眠ろう。建設コンサルタント技術者として生涯を東北の復興に捧げる決意をする。



図3：崩壊した防潮堤（仙台湾南部海岸）



図4：被災地調査中の私（仙台市若林区）

### 3. 富山移住の決意（2016年）

東北の復興を決意し5年、復興道路（三陸沿岸自動車道等）工事が順調に推移し、一部の用地制約等で工事が進捗しない防潮堤を除き、東北沿岸部の様相が様変わりしてきた。

息子が国立富山高等専門学校に入学し、3ヶ月を過ぎた7月下旬、夏の甲子園大会 富山県予選が開幕。息子は1年生ながら富山高専野球部エースとしてピッチャーマウンドで奮闘するも、惜しくも1回戦1-5で敗退。この出来事が私の人生を変えることとなる。

国立富山高等専門学校 射水キャンパス硬式野球部が県予選でコールドゲームを免れたのは2012年以来4年ぶり。この日から1年生エース開米は他校からマークされるとともに、皆無であった練習試合の申し込みが殺到する。新人戦となる秋の大会に父兄は期待する。

ところがである、国立高専の夏休みは例年8月10日～9月20日、その間、学生寮は閉鎖され寮生全員が帰省する。新チームで挑む秋の大会は9月中旬に開幕するため、県立・私立高校とは異なり、夏休み期間中に公式戦を迎えることになる。ご察しのとおり、1年生エース開米は帰省先の仙台市で夏休みを満喫、全く練習に参加できない状況に陥る。しかも野球部員は総勢9名のため、エース不在で部員8名となり、せっかく申し込みされた練習試合は全てキャンセルすることになった。

『私（父）が富山に住めば、長期休暇中の宿舍を確保でき、高専野球部9名で練習試合もできる』。これが富山移住への決意となる。

### 4. 仙台から富山へ（2017年）

2017年、息子の野球生活支援と高校野球の試合見たさで富山市に移住を果たす。

2017年7月17日、夏の富山県大会、息子エース開米の奮闘は富山ローカル紙を飾った。

『富山高専射水キャンパスが夏初勝利』

『高専射水、第3シード高岡向陵を撃破』

巨人V9を知る野球バカの私にとっては、キャプテン（ちばあきお作：月刊少年ジャンプ）、ROOKIES（森田まさのり作：週間少年ジャンプ）が現実となった、夢のような1日であった。

その日のうちに祝勝会、ここが国立高専の良さ、選手、父兄ともに3回戦の必勝を誓った。



図5：たった9人での校歌斉唱

ところが、翌々日の新聞紙面『痛み止めを打って出場、骨折か?』。ライトを守る3年生が骨折していたのは事実であり、痛みをこらえながら出場している姿を見て、骨折をした3年生の両親のみならず、野球部関係者、父兄全員が涙を流しながら見守っていた。本人は3回戦への出場を嘆願したが、学校判断で3回戦を辞退した。

2017年の4月～7月の練習試合は一度も負けていなかっただけに、本気で甲子園を目指していた。一度も負けなかったチームは甲子園優勝

校の大阪桐蔭高校と高専射水のみ。



図6：夏の大会3回戦辞退

## 5. 富山は食の宝庫（現在）

高校野球も終焉、息子は現在、高専4年生。野球部後輩のためにバッティングピッチャーを務め、高専卒業後、進学先となる大学での野球部エースを目指し、トレーニングに励む。

私は、立山連峰の絶景と富山湾の海の幸に惚れ込み、富山移住生活を堪能している。今の目標は、魚釣りを覚え（経験ゼロ）、10年以上ご無沙汰のゴルフ練習を再開し、富山の大自然を今以上に満喫することである。

## 6. 終わりに（建設コンサルタントの使命）

嘗て、我が国は温暖な気候と豊かな経済を背景に発展を続けてきたが、阪神淡路大震災、東日本大震災の想像を絶する惨状を目の当たりにして以来、災害の脅威に翻弄されている。

私の建設コンサルタント人生も、正に災害との戦いであると言っても過言では無い。大地震や巨大台風など、凄まじい地球のパワーに振り回されながらも、災害対応を通じて建設技術者の力量を増してきたと実感している。

近年、毎年のように豪雨、地震災害に見舞われ、多くの尊い人命が失われている。国土強靱化は犠牲となった御霊の叫びであり、その叫びに耳を傾け、適切な施策を実践し、安全・安心な国土形成こそが、我々、建設コンサルタント技術者の使命と感じている。

『富山は立山があるから台風は来ない』、この都市伝説を鵜呑みにせず、安政5年（1858年）2月26日に発生した飛越大地震（M7.1）と、その後の立山砂防の歴史を学び、今後も富山の建設

コンサルタント技術者として、更なるステップアップに努める所存である。